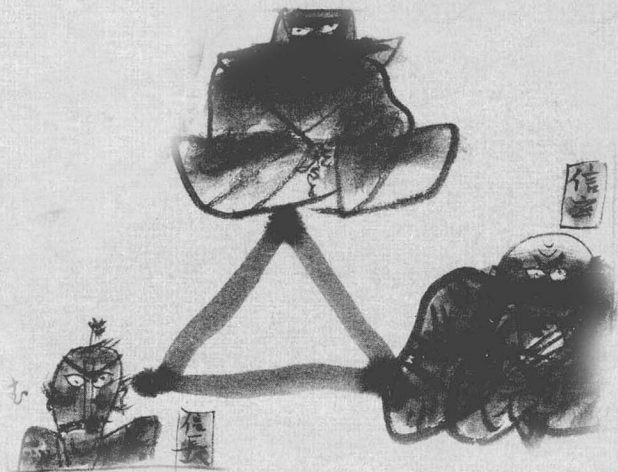




# 室町幕府草紙

山田風太郎



新潮社



室町お伽草紙  
むろまち おきぞうし

一九九一年七月十五日 印刷  
一九九一年七月二〇日 発行

著者 山田風太郎  
やま だ ふう たろう

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

郵便番号一六二 東京都新宿区矢来町七一  
電話 業務三(三三六)五一一一  
編集三(三三六)五四一一 振替東京四一八〇八

印刷所 二光印刷株式会社

製本所 大口製本印刷株式会社

価格はカバーに表示してあります

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Futarō Yamada 1991, Printed in Japan

ISBN4-10-323104-1 C0093

室町お伽草紙

もくじ

室町・二都物語	85
父子 <small>ふし</small> にして敵	78
三人の信玄	71
淀のほとりの風林火山	64
飯綱 <small>いづな</small> 使いの関白法師	57
越 <small>こ</small> の毘沙門天	50
吹くや鞍馬 <small>くらま</small> の青嵐 <small>あおあらし</small>	44
東海のかんしゃく婆沙羅	37
香具耶 <small>かぐや</small> と護衛者	29
ここぞ一輪花 <small>はな</small> の御所 <small>ごしよ</small>	22
都 <small>みやこ</small> は野辺 <small>のべ</small> の夕雲雀 <small>ひばり</small>	15
日吉丸京へ	9

無国無人齋 むこくむにんさい 92

町人城の闇軍師 99

白狐と白鳥 びやつこ はくちよう 106

マラタトウ！ 114

謙信自撃魔 けんしん じげんま 121

本能寺溝は幾尺 ほんのうでら いくせき 128

魔人松永弾正 135

紅草履見参 べにぞうり げんざん 143

剣聖ずでんどう 150

軍法三日月問答 みかづき 157

龍虎相打つ信長・謙信

香具耶隱形の術 かぐや おんぎよう 171

洛中洛外かくれんぼ 178

四条大橋とおせんぼ 184

アッ、カーン！ アッ、カーン！

191

下天の内をくらぶれば 198

桶屋形の戦い 205

恋する信長 212

勘介流きつつきの計 218

馬盥ばだらいの光秀 225

珍陀造りのこぶとり屋 232

クマンの樽はどんぶらこ 239

難波なにわ法城図 246

虫めづる姫君 253

鞭声べんせい肅々しゆくしゆく淀川を渡る

259

超時空・大坂秋の陣

266

ここは難波の川中島

273

三角洲同盟さんかくす

280

利休の待った

287

紅帆こうはん南蛮船

294

攻防・堺北ノ門

301

攻防・堺東ノ門

309

攻防・堺南ノ門

318

濤なみと雲のかなた

326





室町お伽草紙

足利の末、織田氏いまだ志を伸ばさざるとき、  
すでに微行して堺浦に至れるは、これ何の用ぞ。

—— 勝海舟「吹塵録」——

日吉丸京へ

一

もう短夜たじやの季節になつていたが、まだ天地は闇といつていい時刻であつた。

その闇の精のような真つ黒な一団が、京から南へ、伏見の方向へむかつて、地ひびきたてて歩いてゆく。

京から出て南流する鴨川かものがわは、やがてその街道を横切つて桂川に合流するが、その道を横切るところに、荒けずりだが、ながい橋がかかっている。勸進橋かんとしんばしという。

その橋へかかったころ、彼らがみな、桶かきのようなかたちをした黒いかぶとをかぶり、黒い具足をつけ、槍や薙刀なぎを林立させた、三十人ばかりの武者であることがおぼろに浮かんできた。

と、橋の途中で、突然、声があがった。

「痛っ」

という悲鳴と、

「なんじゃ、人か？」

と、びつくりした声と。

武者たちの姿は浮かんできたが、彼らのほうが、橋のらんかんの下に横たわっているものがよく見え、だれかそれを踏んづけたいらしい。

もつともそれは薙なぎの一塊としか見えなかつたのだから、むりもないが——その薙をはねのけて、ムクムクと起きあがつたのを、夜明け前の光のなかにも、投頭巾なげずえんをかぶつてはいるが、十五にも至らぬ少年の顔と見て、

「なんだ、乞食小僧か」

と、踏んだ男は舌打ちして、

「人間がこんなところにごつておるとは思わなんだ」

いいすてて、ゆきすぎようとした。と、

「やい、待てっ」

と、その少年が叫んだ。手をのばし、相手の槍の石突きあたりをひつつかんで、

「ひとを踏んづけておいて、そんなあいさつをするやつがあるか。あやまれ」

「なにい？」

侍はちよつとめんくらった顔を、たちまち激怒の相に変えて、

「橋とはいえ、こんな大道に寝ているやつがあるか。こら、離さんか、えい」

と、ひったくった槍をかまえ、その柄で相手をなぐりつけようとした。

「あつ、やるのか！」

少年はもんどり打って、あやうくこれかわすと、らんかに飛びのつて、まるでむささびみたいにその上を、二、三間もうしろへ逃げた。

「こいつ！」

かつと眼をむき、いよいよ本気になって、桶かぶとの男が、こんどはもろに槍をかまえてそれを追っかけようとしたとき、

「おい、そんな乞食小僧を相手にしておる場合ではない。ゆこう、ゆこう」

と、仲間のだれかが、声をかけた。

立ちどまっていた集団は、またいっせいに歩き出す。

「けっ——猿みたいなやつだ」

ひとにらみして、槍の男もそれにまじる。

ひとり残った小僧は、小手をかざしてそれを見送って、「うわ、あんなにたくさんいたのか。くわばら、くわば

ら」

と、はじめてぎよつとしたような声を出し、らんから飛び下りた。ポロポロのたつつけ袴をはいている。

橋板が地面より寝るのにらくなので、夜露をふせぐためにそこらに落ちていた藁をひろって、糞虫みたいなくまって寝ていたところを、いきなり踏んづけられた腹立ちと、夜明け前のねぼけまなこのために、よく相手方の全容を見すかさないで文句をつけたらしい。

ねぼけまなこは、くるつと黒い大目玉になっている。いま、猿みたいなやつだ、と呆れられたが、その軽捷な動作ばかりでなく、顔かたちもたしか猿と一脈通じる感じがなくてもない。

「ありや、どこかの郎党衆にちがいない」

さつきまで寝ていた場所にもどって、まだそのほうへ眼をやって、

「そうだ、ことによつたら仕官の手づるになるかも知れないぞ」

と、手を打った。

「なんだか、ただの侍衆とはちがう感じがする。ひとつ話をかけて見よう——と」

足もとに、チョコナンと四角な箱があった。さつきまで野宿の枕頭まくらにおいていたものだ。とりあげると、紐ひもが

ついていた。その紐を首にかけると、箱は胸に吊られ、どうやら物売りの野師らしい風態になった。

そして、その姿で彼は、スタスタといま南へ消えた武者のむれのほうへかけ出した。いまあんな喧嘩を起したくせに、どうやら仲間に加えてもらいたいという望みを起したようだが、度胸がいいというおうか、図々しいというおうか。

二

まんまんたる宇治川の流れから、一艘の舟が岸にこぎわたってきた。

日の出にはすこし間があるが、大河の水光はその一帯を一刻はやく夜明けにしている。下流はすぐに淀川となる。

まだ後世のくらわんか舟とか三十石船などない時代だが、淀という名の由来のごとく、あちこちに淀みを残してゆるやかに流れる河は、昔から舟の往来をさかんにして、上流のこの宇治川にのぞむ伏見には渡し場はもとより物売りの集落さえ作り出していたのである。

が、その店界隈にもまだ人影はない。わりに大型の舟は、しかしその渡し場さえ避けて、す

こし離れた芦むらへこぎ入って、岸についた。

舟からばらばらと下り立ったのは、十数人の男たちで、おまけに馬までのせてきたと見えて、これも上陸させた。その数、十頭ばかり。男たちが舟からがんじょうな箱を次から次へととり下ろし、馬の背の両側につけはじめたと、三分の一ほどつんだとき、ふいに、

「待て」

という声がかかった。

制止した男は、きつとして河とは反対の方角に眼をやった。

長くのびた芦むらから、いつせいに黒い影が立ちあがった。伏せていた槍、薙刀もおし立てた。その半円の陣がみるみるちぢまってきた。

そのなかから、

「堺から三好どのへ献上の宋銭だな。ご苦労」

と、野ぶとい声で呼びかけた者がある。

「ここで受領しよう。馬ごめにもらうとしようか」

「あなたがたはどなたでござりまする？」

きいたのは、いま制止した男だ。宗匠頭巾をつけた姿で、あわてた風もなく、ゆっくりと片手をふった。

「たしかにこちらは堺からの人間でござるが、持参したものは直接三好家へ運びこむことになっております。そ

のために、ごらんのように馬まで用意して参りました。幸領さいりやうとしてめつたなおひとに途中でおわたしすることはなりません。

じいっとこちらをすかし見て、

「ははあ、松永さまの桶かぶと党の方々でござりますな」

と、いった。

「その通りだ」

相手は威圧的に答える。

「いうまでもなく松永は三好家の大家老、桶かぶと党は弾正さま御秘蔵の旗本、ここでその献上物を受けとつてもどこからも異議は出ぬはず。——やつ？」

突然あわてた声に変つたのは、いま荷をつんだ馬をふくめて、他の馬や箱などを、またもとの舟へ運びもどそうとしている光景を見たからだ。さつき宗匠風の男が手をふつたのは、その合図だったにちがいない。

「うぬら、松永と知って宋銭の献上をとりやめるのか！」

「宋銭の献上は堺から自発的に思い立ったことではござる。やめようと、やめまいと、こちらの自由」

と、宗匠頭巾はいった。

いま朝の光はようやく河にひろがって、その男の姿を

あざやかに浮かびあがらせている。まだ三十くらの若さだが、どっしりとして貫禄充分の面だましいであった。「しかし、どうしてこのことを探り出されたものか。さすがは弾正さまと感心しますが、ともあれ三好さまと松永さまの不仲はもはや天下周知のこと、この献上物を松永さまにおわたしするわけには参りませぬ。堺会合衆せんのかうえき千宗易、幸領として自分の責任でこれより引き揚げます」堂々と名乗った。

その気魄きぼくにおされて、棒立ちになっていた桶かぶと党であったが、そう宣言されているあいだも、馬や荷が舟に収容されてゆくのにわれにかえって、

「そうはさせぬ。やるなっ」

一人が槍をふるうと、いっせいにどつと殺到しようとした。

そのとき、轟然こうぜんたる音が相ついで二発あがったと見るまに、桶かぶと党の二人がもんどり打って芦のなかにころがった。

「あっ……鉄砲だ！」

彼らはたたらをふんだ。

舟ばたに数人の男が、まさしく鉄砲をのせて、そのうちの二つの銃口が煙を吐いているのが見えた。

この南蛮渡りの武器の驚異すべき力が、ようやく世に

ひろく知られはじめたころのことである。それを撃つには多少時間を要し、火繩の火も見えるはずだが、おそらくさっきの宰領の合図で、舟ばたのかけで操作したのにちがいない。

「では、ごめん」

千宗易と名乗ったその宰領自身が、最後に悠々と背を見せたのに、

「待たぬか！」

叫んで、また動きかけた桶かぶと党を、ふたたび三発の銃声が襲って、三人がまたたおれ伏した。さしもの荒武者たちも、これで完全になしばりになった。

やがて舟は、何ごともなかったように河心へもどってゆく。そして、へさを下流にむけると、暁光のなかをすべり去った。

松永桶かぶと党のめんめんは、菌がみしながらそれを見送ったが、どうすることもできない。

やがて彼らは口々に呪いのあえぎをもらしつづつ、味方の死傷者を背負い、背負わない者もよろめくような足どりで、その芦原から立ち去った。

あと、静寂に帰した芦むらから、ムクリと首をもたげた者がある。

「ふうん、都の大將はいま三好とか松永とかきいたが」

さっきの野師小僧であった。

「どうやら堺から三好への献上錢を松永が横どりしようとしたらしいが、三好松永は主従ときいたが、へんな主従もあったもんだ」

と、ひとりごとをいって首をひねる。野師小僧にしてはなかなかの口だ。

「それにしても、その松永の桶かぶと党とやらを蹴とばす堺とはたいしたもんだなあ。蹴とばすどころか、鉄砲で追いはらちまった。ふうん、あれが鉄砲か。えらい音だ。あんなおつかないものを使われちゃ、桶かぶとも樽かぶともかないっこないや」

舟の消えた宇治川の果てにむけた眼を、こんどはくると北へまわして、

「いつそ堺へゆこうかな？ 京へいってもしょうがないようだが……いや、せつかく伏見にきたんだから、やっぱり京へゆこう。そこでひとつ天下の形勢というやつを見てやろう」

と、うなずいた。

### 三

十年つづいたいわゆる応仁の乱が、くたびれ終戦のか



たちをとつて鎮火したのは約七十五年の昔。

汝や知る都は野辺の夕雲雀あがるを見ても落つる涙はと、当時詠まれた惨状は、いくらなんでももうあとかたもなくなつてゐるはずだが、なんとか復興しように見えるのは一部の大路だけで、大部分の杜寺や公卿町は依然さびれ切つてゐる。全体の印象としては、廢市といつていい荒涼味さえおびてゐる。

あちこちには至るところ焦土のままの空地に、蓬々と草がそよいでいた。まさかこれは応仁の乱の名ごりではないが、その名の大乱は終つても、以後ほとんどやむことなく、京をめぐつて大小の合戦、宗門争い、土一揆などの小乱がくりかえされてきた結果である。

ところが名ある大路に出ると、これは室町最盛期より雑踏してゐる、といつていいかも知れない。

事實上、幕府というものがなにひとしい都なのに、意外に武士が多い。ただし、幕府健在のころの威儀莊重な武家姿はほとんど見られず、足輕風というより無頼漢風のむれか、田舎から出てきたらしい粗野ないでたちの侍たちであつた。みな一旗組にちがいない。

それよりむろん多いのは、職人や下人、それに放浪芸人たちだ。扇売り、葉売り、針売り、草履売り、鳥刺し、山伏、巡礼、巫女、高野聖、陰陽師、猿まわし。――

それらをあてにして、両側の店々も数だけはおびただしく、酒屋、油屋、たたみ屋、御簾屋、鍛冶屋、経師屋、数珠屋、烏帽子屋、刀とぎ、豆腐屋、ところてん屋。……

ただし、どの店も、いつまた焼け出されてもいいような仮建築めいた構えであつた。

総じて、人も家もうす汚なく、殺伐で、野卑の臭いがあつた。

梅雨ががあつて何日か、太陽はそれらの上にかつと照りつけてゐる。すべてが汗にひかり、砂ほこりにまみれてゐた。都大路にはちがいないが、けもの国の一劃のようであつた。

そのなかを、一人の小僧野師がゆく。

「ふうん、腐つても鯛、というが、さすがは京だなあ」  
まわりを見まわす眼は、キラキラと黒びかりして、  
「これなら、奉公口もありそうだぞ。……」

数日前の朝早く、伏見ちかくの勧進橋で寝ていたあの少年である。

彼の眼には、この殺伐な大群衆も花の都のにぎわいに見えるらしい。

ときどき適当な辻を見つけると、そこに立つて、胸に